

遺跡の動態と集団関係

——榛名山東南麓における縄文時代遺跡の現状と課題——

鬼形芳夫

1 はじめに

北関東の北端の平野部から山岳地帯への移行部に位置する赤城山と榛名山は不完全ながら円錐状火山で、円錐状火山特有の火山山麓緩斜面を四方に広げている。地形的な位置とその山容の雄大さは周囲の地形と調和する群馬県内の代表的な占地地形であるが、この両山の南山麓地帯は縄文時代の代表的な遺跡密集地でもある。

群馬県内の縄文時代の遺跡分布を概観すると、赤城山や榛名山の広大な山麓面に密集する遺跡地帯があると同時に、山岳地帯の河川流域に点在する狭小な台地面などでもいざれかの時期に比定できる遺跡地を見いだすことが出来る。分布密度の相異は主に地形等の自然環境条件に大きく制約される傾向にあるが、立地条件に恵まれた場所にはいたるところに遺物の分布を認めることが出来る。しかしながら周知の遺跡は極めてすくないのが現状である。

一方、県内の縄文時代研究は開発に起因する遺跡発掘調査例は増加の一途をたどり、個々の遺跡の検討資料は蓄積されつつあるが、いまだ総合的かつ体系的な研究をめざす組織的な研究は無きに等しい。組織的な研究体制の確立を切望したいが、その前提となるべき基礎作業として遺跡分布調査を積み重ね県内の遺跡を網羅的に把握し、それぞれの遺跡の地理的背景、時期、性格、特徴などを具備する実態に即した台帳整備こそ不可欠な条件と考えられる。

考古学的に遺跡を検討する場合、発掘調査で得られた資料を詳細に吟味、分析するばかりでなく、その遺跡をとりまく歴史的環境や自然的環境との有機的な結びつきを追及する作業も重要な研究分野としてよく認識されている。しかし現実的には一遺跡の発掘調査資料は遺跡をめぐる関連資料の不足のため遺跡をとりまく地域の実情より、遠隔地の資料に比較検討のよりどころを求めがちであり、遺跡をめぐる歴史的および自然的環境との有機的な結びつきを求めようとする研究姿勢は観念的な問題意識としては定着しているが、いまだその域を脱しきれないのが現状であろう。考古学的資料は、地域の歴史、自然的環境の中に正しく位置付けられて、歴史的資料としての価値を生じる。そのためにも分布調査の果たす役割は重要といえる。

本稿は、採集した資料をもとに榛名山東南麓地域の遺跡分布の現状を紹介するとともに、赤城山西南麓の遺跡分布動向をふまえ、土器型式編年学の成果にもとづいて遺跡地と採集資料を検討し、地域の実情に根差した遺跡の動態と人々の集団関係の在り方を素描しようと試みた。

なお本稿対象地域は国土地理院が発行した5万分の1地形図「下室田」に表された車川以南の山麓地域で、行政区分では群馬郡榛名町箕郷町内的一部分が含まれる。

2 椿名山東南麓の地形と景観

椿名山は赤城山と同じく欠頂円錐状火山で、円錐状火山に特有な山麓火山緩斜面を四方に広げ、利根川対岸の赤城山とともに群馬県のほぼ中心部を占める。

椿名山東南麓の地にたって周囲を見渡すと、南方には広大な関東構造平野が視界を広げる。平野の西側には秋間丘陵、富岡丘陵、御荷鉢山系、秩父山系の山並みが重なり、荒船山系の背後には信州の八ヶ岳の山嶺をのぞむことができ、東側には長大な裾野が尾を引く赤城山と足尾山系をのぞめる。高い日照度と明るく広大な視野は縄文時代以降も変わることはない地形景観である。さらに地形図を広げて周囲を見渡すと山麓の背後には四阿山、小野子山、子持山、武尊山さらに北方には日本海側との分水嶺を形成する上越国境の高山地帯が連なり、北関東の平野部から上越山岳地帯への地形変換部にならびそびえる赤城・椿名両山麓地域の占める地形的な位置を理解することが出来る。

南からのぞむ椿名山の山並みは、東から水沢岳、二ツ岳、相馬岳、椿名富士、天目山などが山頂を形成する。最高峰の掃部岳の1449mである。これらの山並みはカルデラを橢円形状に取り囲み、カルデラの外壁を形成する外輪山や寄生火山から成り立っている。またカルデラ内には椿名富士や椿名湖がある。火山の活動期は第三紀末から第四紀初期以降と考えられていて、考古学上の絶対年代の指標となる中部ローム層中の八崎浮石層、六世紀代の二ツ岳爆発によるF A層・FP層などの給源地として知られている。標高600m付近が山腹部から山麓緩斜面への地形変換線にあたる。山腹部は開析が進む起伏量が高い急峻な地形で、緩斜面とは好対象をなす。火山緩斜面の平均勾配は60/1000～70/1000である。山体部をほぼ同心円状にとりまいて形成された山麓部は、その方向によって地形的差異が著しい。北方の山麓面は原地形をほとんど残さないほど開析しつくされているが、西方の山麓面は放射状谷の発達が少なく、原地形面が広く分布している。東麓は深い放射状谷の発達がない起伏量の小さい平坦面で、本稿対象地域の東南麓は、放射状谷が発達して開析が進み、谷地と台地とが特徴的な地形を形成している。山麓緩斜面の末端は周囲の地形要素の相異から比較的明瞭に区分出来る。背後の北側は東流する吾妻川の侵食崖で画され、東側にも渋川市付近で利根川による侵食崖が形成されている。南側は烏川沖積低地帯と左岸沿岸流域に形成された侵食崖で区分できる。東麓の平坦な地形は相馬ガ原扇状地の形成による。扇状地は山腹裾付近を扇頂として扇状の地形が山麓面をおおい扇端部は前橋台地と交錯するが、扇状地地形は山麓の一般的な地形と景観を一変している。⁽¹⁾

本稿の対象地域は広大な椿名山麓の東南麓の一部を占めるに過ぎない。対象地域は第一図の地形図に表された範囲で、24.5ヘクタールの面積がある。現行の行政区画には群馬郡箕郷町富岡、和田山、白川、群馬郡椿名町白岩、高浜、本郷、三子沢、宮沢、十文字が含まれている。対象地域の北縁は車川が侵食し、左岸流域は比高差50m余りの侵食崖が形成され、車川を境に以南と以北の地形様相の差が著しい。車川はやがて山腹深奥部に源を発する椿名白川に合流するが、箕郷町の町並み以南の椿名白川は典型的な扇状地地形を形成しつつ山麓末端部を侵食している。南端を

画す鳥川と鳥川低地帯は秋間丘陵との間に形成された巾約1kmの沖積低地帯で、山麓東南部で榛名白川と合流している。

このような対象地域は車川、白川扇状地、鳥川沖積低地帯に囲まれている。この東南麓の地形は帶状台地と侵食谷が主要形成要素であるが、帶状台地と侵食谷の広がりは鳥川右岸の榛名町下室田から上室田のかけても分布する。この地域は地層堆積が厚く調査不能地であるため、今回の対象地域から除外せざるをえなかった。しかし、本稿対象地域との間は開析が進み斜面の多い丘陵地形が介在しており、本稿対象地域は地形的にみると一つのまとまりをもつた地域であるといえる。

対象地域は標高125mから300mの標高差内にある。この地域の特徴的な地形は帶状台地と侵食



第1図 榛名山東南麓の遺跡

谷にある。面積24.5ヘクタールのうち台地11.6ヘクタール、斜面と谷地が7.5ヘクタール、丘陵地5.3ヘクタールの割合にある。主要浸食谷の先端は標高300mから350m付近の湧水に源を発し、扇状の流路をたどって山麓緩斜面を浸食し、やがて烏川や榛名白川に合流する。帯状台地は両縁辺を主要浸食谷に浸食され、浸食谷は枝状に分岐した支谷群をしたがえているため、帯状台地群の縁辺流域に舌状台地の地形群を形成している。帯状台地の地質は火山碎屑岩・角れき凝灰岩の基盤上を、関東ローム層がおおい、表層は沖積層であるが、沖積層中には浅間山起源の噴出物の占める割合が多い。台地面と浸食谷底の比高差は山麓上端部ほど高く、また山麓西半部は全域的に浸食作用の影響が強く比高差が高い。帯状台地の走行はほぼ直線的に烏川、白川流域の方向を目指すが、榛名町蔵屋敷、奥原地区と榛名町下手長、上手長地区の台地走行は烏川流域とほぼ平行な関係にある。これは形成基盤の相異によるものと考えられている。このように榛名山東南麓の地形は赤城山西南麓の一般的な地形と類似点が著しい。

3 榛名山東南麓の縄文時代遺跡分布の現状

榛名山東南麓の縄文時代の遺跡数は、昭和60年3月現在で、89遺跡地におよぶ。⁽²⁾ そのうち箕郷町地内は21遺跡であるが、車川北岸の金敷平、善地地区にも遺跡地が多い。⁽³⁾ 榛名町地区内は68遺跡地を確認したが、地層堆積が厚く遺跡の存在を知る手掛かりが少ない地域がまだ多いため、⁽⁴⁾ さらに遺跡数は増えうる。烏川右岸の里見地区の河岸段丘上や上室田地区の台地上にも遺跡分布は多い。

(1) 箕郷町の遺跡分布

榛名山東南麓の箕郷町地区内の対象地区内では21遺跡地を確認したが、その分布と遺跡地にかかる諸時期を表す主な土器拓影は第3・4図と第1・2表の通りである。以下、主な遺跡地をめぐる状況をつけておきたい。

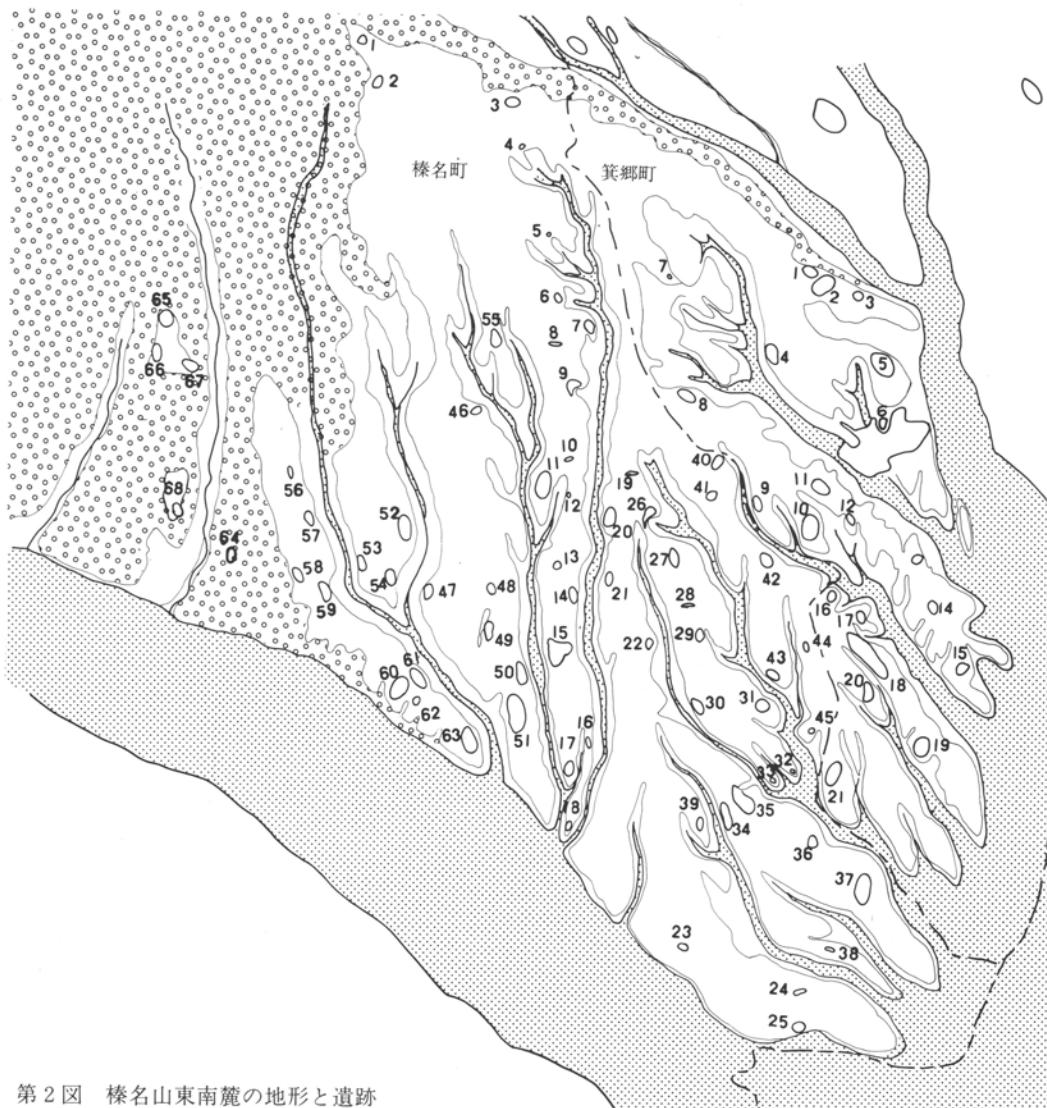
No.5遺跡は典型的な舌状台地に占地し、散布量も多いが、西半部は表層土砂採取が進行中である。No.6遺跡は鳴沢湖の北岸の波打ち際に存在するが、現状からは地形状況の再現は望めない。No.4遺跡は広域におよぶ表層土砂採取により遺物が散布していたが、遺跡はすでに無い。No.8遺跡は道路改修工事の際に多量な遺物類が出土したが、現在でもその周辺に多量な遺物の散布を認めることができる。⁽⁵⁾ No.9遺跡は台地西縁辺部での土砂掘削工事によって多量の遺物が出土していたが、遺跡はさらに周辺に広がりうる。第3図の9-3~5は十三菩提式の色彩が強い。No.17遺跡は、すでに表層土砂採取により壊滅する。No.18遺跡は多量な土器片類を散布するが、これも表土掘削に原因している。散布は広範囲で、石鏸、石皿、打製石斧、磨製石斧の出土も多い。No.21遺跡は広域におよぶ土砂採取により遺跡の存在を知ったが、地層断面に勝坂期の住居跡が確認出来た。

このように箕郷町の遺跡分布は広域におよぶ表層土砂採取等によって存在が明らかになったものが多い。

(2) 椿名町の遺跡分布

椿名町地内では68遺跡地を確認したがその分布と遺跡地がかかわる諸時期を表す主な土器拓影は第5～7図と第1・2表の通りである。以下、主な遺跡地について遺跡地をめぐる状況をつけておきたい。

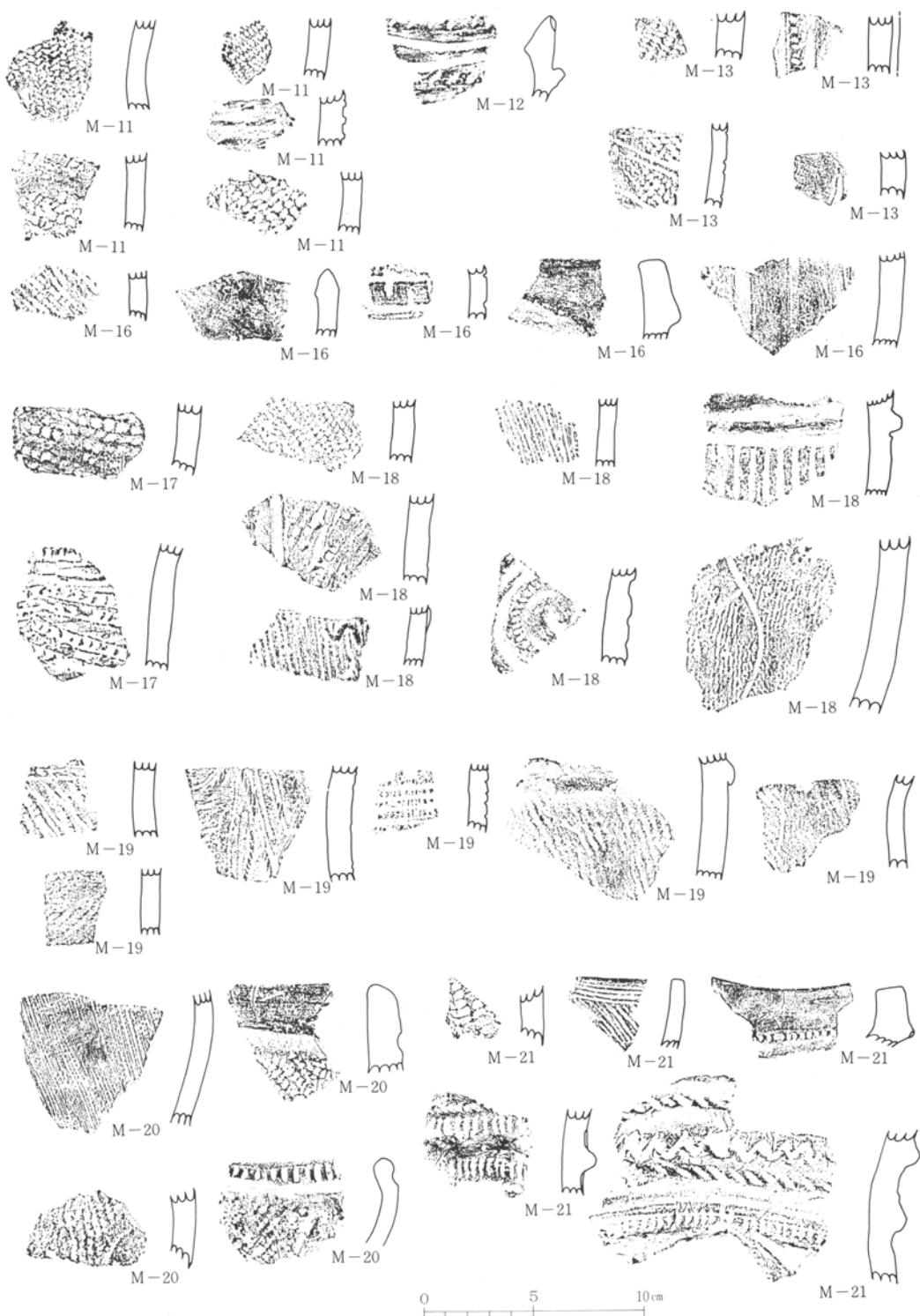
No.5遺跡は表層土砂採取により遺跡の存在を知る。No.8遺跡は台地中央部で、芋貯蔵穴掘削により多量の遺物出土。No.17遺跡の台地先端部はすでに削平され、No.21遺跡は台地西半部は圃場整備事業が完了しているが、圃場整備地域北端部の地層断面中に多量の土器片が出土している。No.27遺跡は奥原古墳調査後の圃場整備事業時に、遺物を採集したが、今は散布を認めることが出来ない。



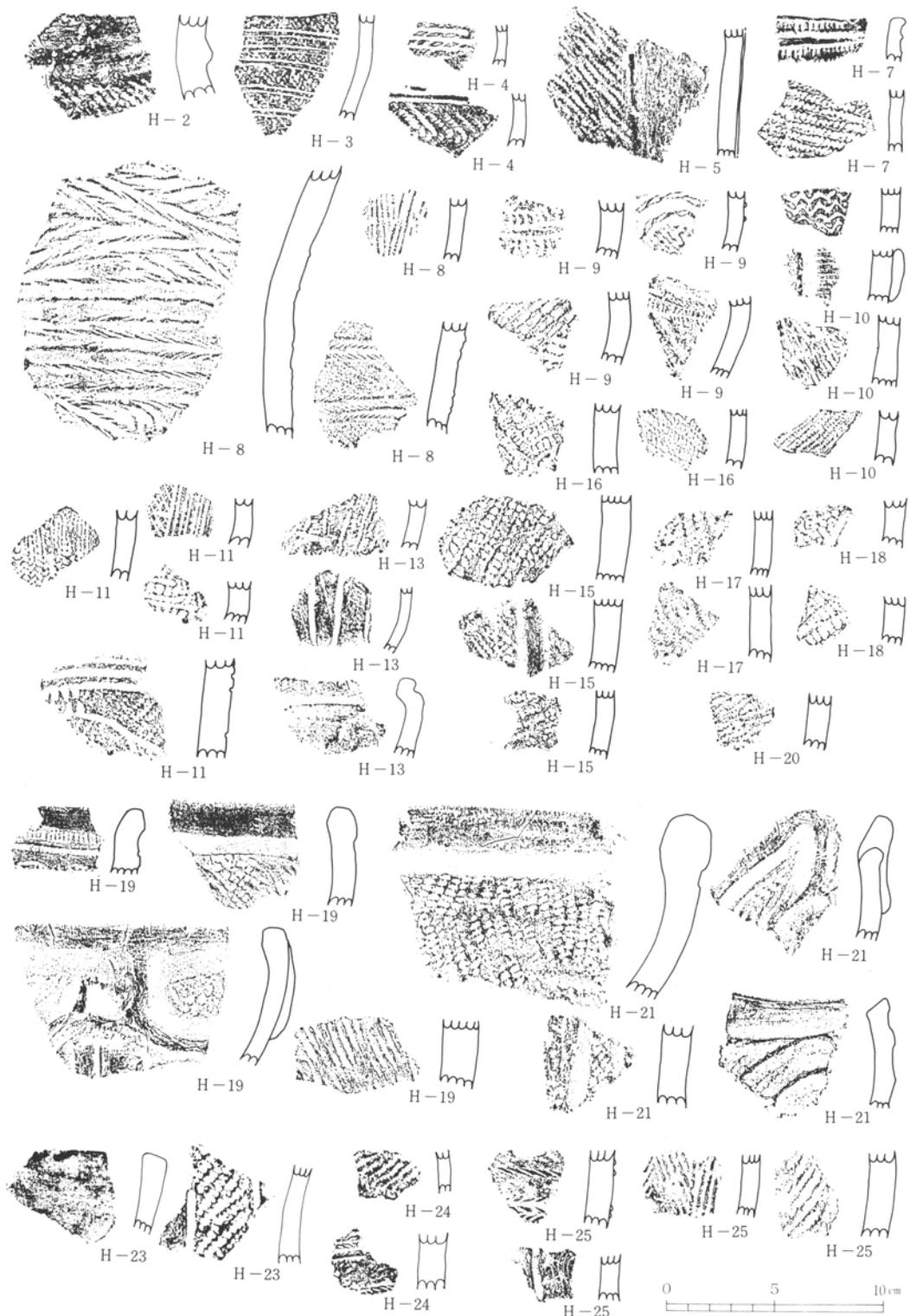
第2図 椿名山東南麓の地形と遺跡



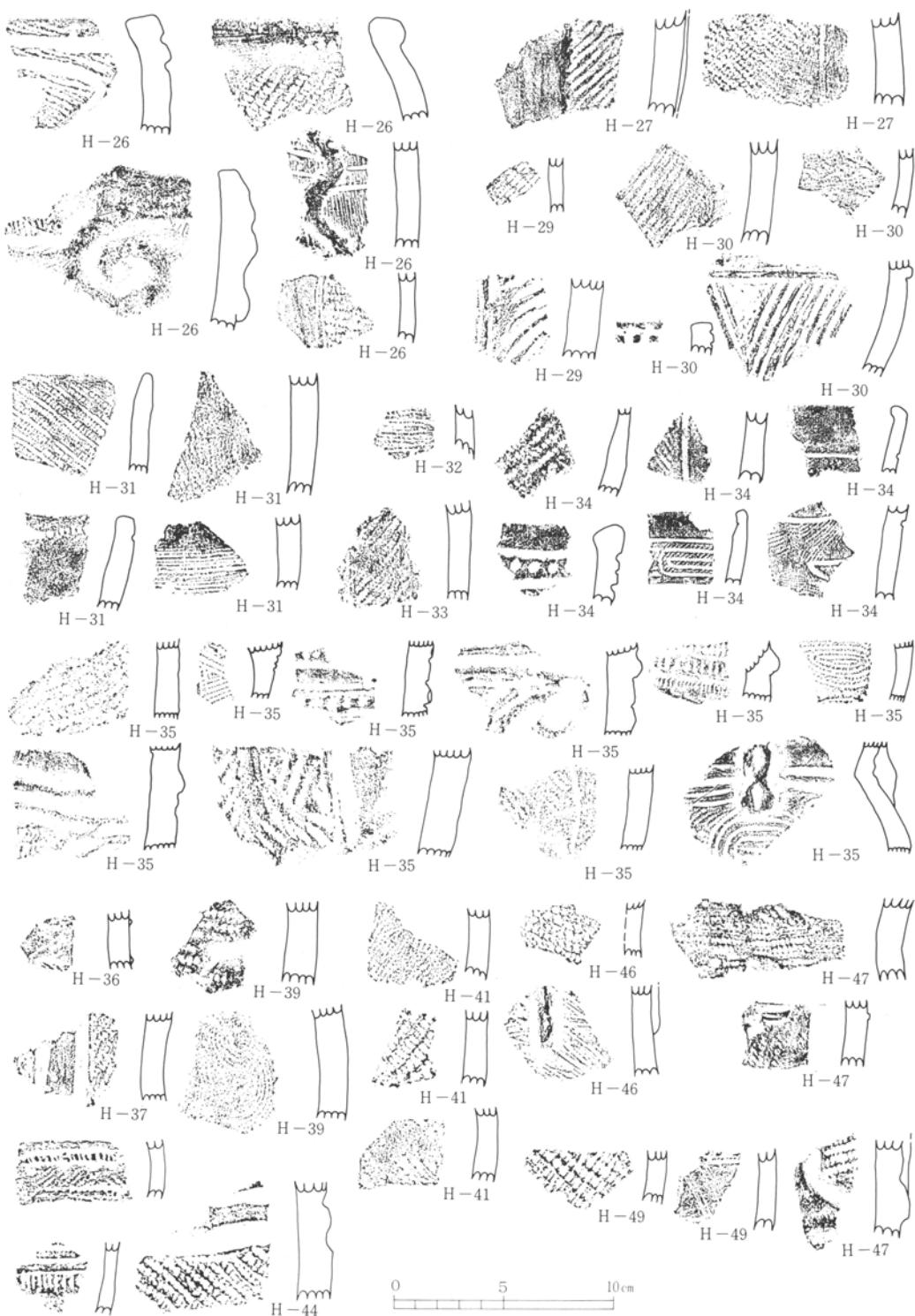
第3図 箕郷町各遺跡で採集した縄文土器片(2)



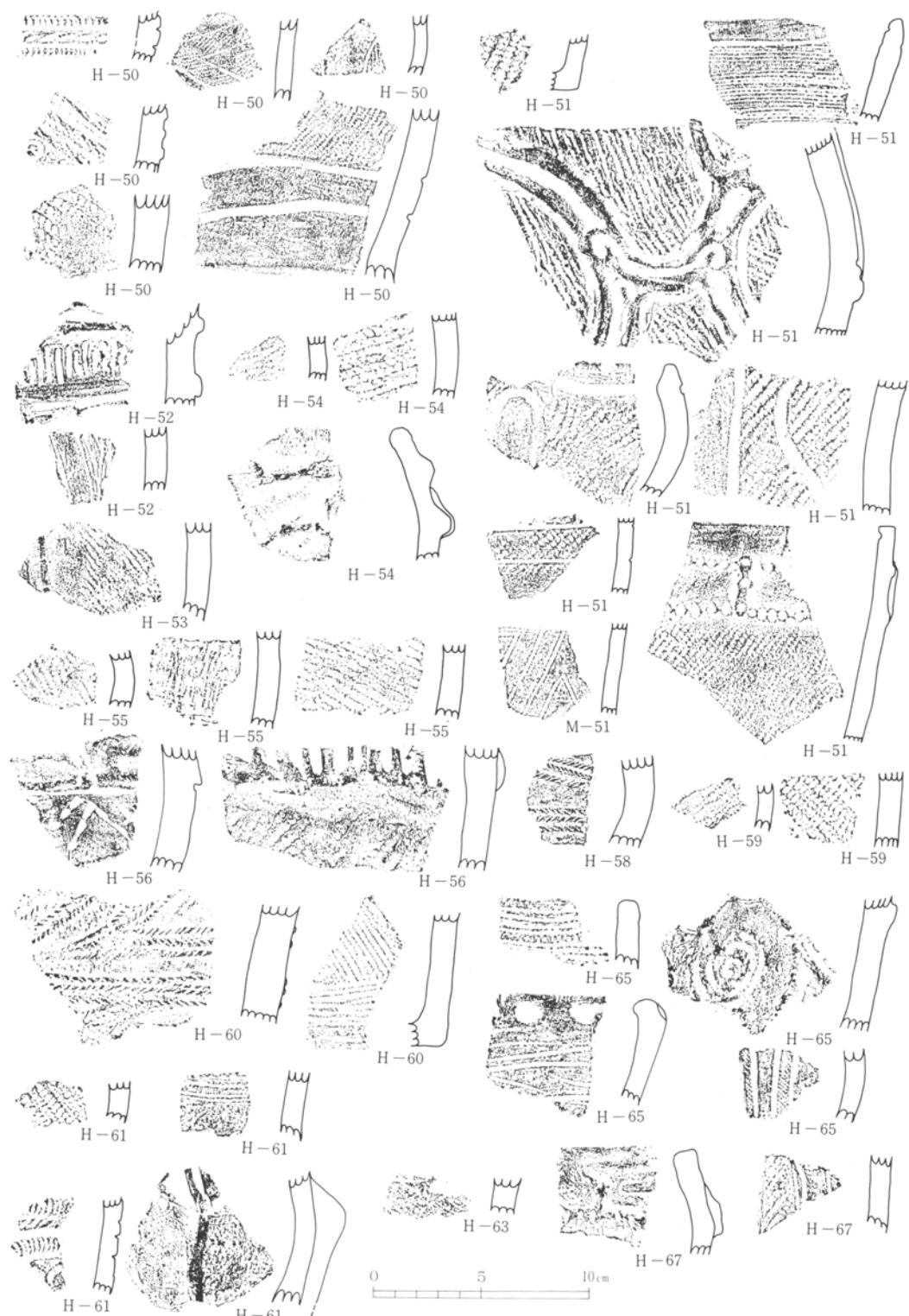
第4図 箕郷町各遺跡で採集した縄文土器片(2)



第5図 棚名町各遺跡で採集した縄文土器片(1)



第6図 棣名町各遺跡で採集した縄文土器片(2)



第7図 棚名町各遺跡で採集した縄文土器片(3)

い。No.27遺跡の台地西半部は圃場整備事業が完了。No.30遺跡の南半部は土砂採取により壊滅する。No.32遺跡は宅地化により壊滅。No.46遺跡は広域におよぶ土砂採取で壊滅的状況。No.51遺跡は耕作による抜根等で多量の遺物類が露出。No.47遺跡は広域にわたる土砂採取で遺物類が散乱。No.52遺跡は土砂採取により存在を知る。No.65、66、67遺跡は台地の頂部や斜面上の散布であるが、中央部全域は土砂採取により削平されている。No.68遺跡は宅地開発による。このように榛名町地内の遺跡分布の確認は、箕郷町と同じように広域におよぶ土砂採取によるところが多く、その時はすでに遺跡地は壊滅的状況におちいっているのは箕郷町の状況と同様である。その他の遺跡地も耕作による深掘、蚕業不振による抜根等によって、遺物類が地表に露出したものがほとんどで、こうした状況下にあるものを探し求めてこそ遺跡の存在を知りうるのが、榛名町地内の東南麓の現状と言えよう。その他、両地内でも広域におよぶ土砂採取等による削平地域があっても、全く遺物類の認められない地区は縄文時代の無遺跡地帯と考えることができるが、これらの場所も広がりつつある。今後の状況を継続して注視し、たえまない踏査活動の必要な地域もある。

4 東南麓における黒浜・諸磯a期から加曾利E期の遺跡分布のあり方

対象地域内で今まで採集した資料を土器型式編年学の相対的年代観に基づいて黒浜・諸磯a期、諸磯b期、諸磯c期、勝坂・阿玉台期、加曾利E期の五時期に分け、それぞれの遺跡地で採集できた資料を時期別に分類し、それぞれの時期に該当する遺跡地を榛名山東南麓の地形図に書き加えた。⁽⁶⁾ そして、それぞれの時期の遺跡分布状態を検討するとともに、前後する時期の分布状態と比較した。⁽⁷⁾ 現有資料の枠内という前提に立つが、こうした資料の比較検討後、客観的事象と考えられ、かつ特徴的な事柄を整理しておきたい。なお黒浜・諸磯a期を同時期に扱うのは黒浜式と諸磯a式の特徴をもつ土器片が同時に散布する遺跡地が大勢を占めるためで、赤城山西南麓の分布状況と同様な事情による。また南関東の土器編年によると、前期から中期への移行過程には十三菩提式、五領ヶ台式、下小野式の諸時期の存在が指摘されている。しかし、これらの時期に比定されている土器片の発見比率は極めて少なく、土器の様相にも信州の晴ヶ峯式、梨久保式の特徴と混在する傾向もある。このため諸磯c期から勝坂・阿玉台期への過程には問題点が多い。これについては今後の研究の進展を待つことにし、現在の段階では割愛しておきたい。

(1) 黒浜諸磯a期の遺跡分布

対象地域のうち、今までに確認できた散布地とその分布は第8図のごとくになる。箕郷町地内で15遺跡地、榛名町地内で32遺跡地計47遺跡地である。そのうち31遺跡には黒浜・諸磯a期に比定できる土器片が混在して散布する。散布地周辺の地形に、舌状台地状の地形を読み取れる遺跡は33遺跡地、侵食谷頭部周辺の台地上に立地する遺跡は、箕郷町No.11遺跡・No.18遺跡・榛名町No.29遺跡などの5遺跡で、その他は帶状台地縁辺部などの分布が4遺跡ある。谷頭部周辺や帶状台地縁辺上の遺跡もあるが、大勢は舌状台地状の立地といえよう。榛名町No.34、35遺跡は帶状台地の両縁辺にあるが散布地の広がりから大遺跡の可能性がある。遺跡分布は山麓全域におよぶ

が、標高300m付近に集中する侵食谷谷頭部周辺上の水系の乏しい台地上に多く、末端部で鳥川と榛名白川が合流する地域周辺の低地面との比高差の乏しい台地上には、散布が希薄な傾向にある。また、散布地の主体的な立地が帯状台地の縁辺に形成された舌状台地地形であるためか、帯状台地の中央部には分布を認めることができない。黒浜・諸磯a期の遺跡急増現象は赤城山西南麓の状勢と同様で、急増現象ばかりでなく、遺跡の立地や占地、地形の景観にも類似点が多い。赤城山西南麓の同期の遺跡急増現象は一台地一遺跡占地に、その背景があったが、榛名山東南麓の遺跡分布のありかたにも帯状台地の縁辺部に形成された舌状台地を基盤とした一台地一遺跡を認めることができる。占地地形の景観にも、台地の先端部や侵食谷の対岸に隣接台地の先端部がのぞめる場所など共通事象が多いのは、成因と形成過程が同様な両南麓地域の地形的背景に起因する偶然の結果ばかりとは考えられない。

(2) 諸磯b期の遺跡分布

対象地域のうち、諸磯b期に該当する遺跡地は、現在のところ20遺跡で、その分布は第9図のごとくになる。黒浜・諸磯a期の47遺跡に比べると、余りにも急激な減少といえよう。榛名町No.8遺跡とNo.9遺跡、No.24遺跡とNo.25遺跡のように近接する遺跡関係もあるが、大勢的には適當な間隔において分散し、しかも、その分布の在り方は一地域に集中することなく、山麓全域におよんでいるといえよう。特に一定の距離をおいた隣接遺跡の関係は注目に値する。例えば、箕郷町No.6



第8図 黒浜・諸磯a期の遺跡分布



第9図 諸磯b期の遺跡分布

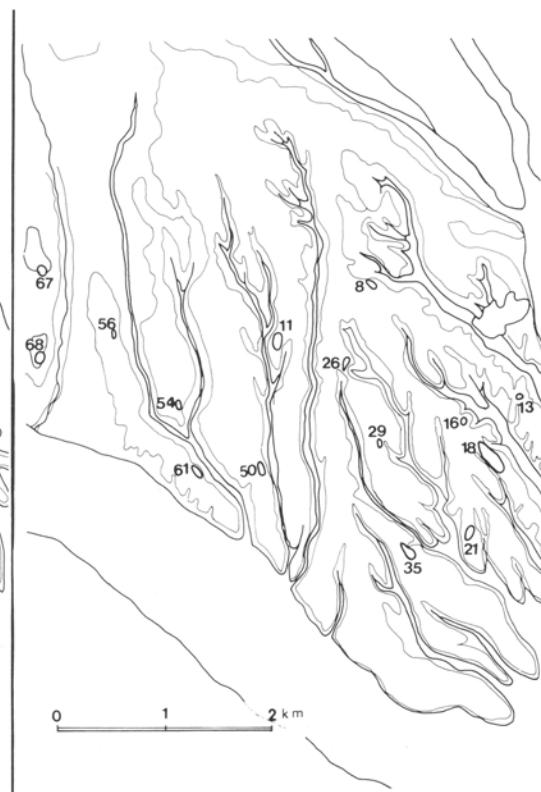
遺跡の周辺には、箕郷町No.5遺跡、No.4遺跡、No.10遺跡、榛名町No.40遺跡の4遺跡があり、それぞれの遺跡間は0.4km、0.8km、1.1kmで平均0.8kmである。これに近い数値が各遺跡間で計測出来る。遺跡の立地は、前時代と重複する遺跡が多いため、それほど変化がないが、榛名町No.8遺跡・No.48遺跡のように、帯状台地中央部に占地する散布地の存在は前時代には認められなかった新しい散布事情として指摘できる。

(3) 諸磯c期の遺跡分布

対象地域のうち、諸磯c期に該当する遺跡地は現在のところ19遺跡地で、その分布は第10図のごとくになる。前代の諸磯b期と同様な分布傾向を呈し、山麓全域にわたり、適当な間隔をおいて分布しているといえる。山麓南端部で、散布の希薄な箇所が多いのは未発見の遺跡存在の可能性を含めておきたい。現状の遺跡分布でみる各遺跡間に介在する距離は、周囲の該当時期の分布状況を網羅的に把握出来ている可能性の高い、榛名町No.9遺跡と同No.31遺跡の周辺に分布する遺跡地との距離関係が端的かつ典型的と考えられる。榛名町No.9遺跡の周辺には、同No.6遺跡・No.46遺跡、No.11遺跡・No.26遺跡・箕郷町No.8遺跡が存在する。それぞれの距離は0.7km、0.6km、0.6km、0.7kmで、ほぼ同間隔をおいて遺跡が存在している。榛名町No.31遺跡周辺の箕郷町No.20遺跡・No.21遺跡、榛名町No.30遺跡・No.35遺跡をめぐる距離関係もほぼ同様といえ、前代の諸磯b期の距離間に比べてより均一性が著しい。



第10図 諸磯c期の遺跡分布



第11図 勝坂・阿玉台期の遺跡分布

それぞれの遺跡地の採集資料の前代までの時間的かかわり方を検討すると、黒浜・諸磯a期以降継続的に遺跡の存続が考えられるもの 諸磯b期に該当する散布資料は認められないが、黒浜・諸磯a期の遺跡地と重複して分布が認められるもの 前後との関係の無い新遺跡地形成による遺跡地の三つの在り方を指摘することができる。継続的な遺跡地は箕郷町No.5・No.6・No.9・No.31遺跡など6遺跡地、黒浜・諸磯a期と重複する遺跡地は箕郷町No.9遺跡、No.21遺跡、榛名町No.10遺跡、No.46遺跡などの7遺跡地、新遺跡地形成によるものは榛名町No.6・No.32遺跡など3遺跡地があり、黒浜・諸磯a期の遺跡地と重複関係にある遺跡の割合が多くなっている。このように均一的な遺跡間の距離と、黒浜・諸磯a期の遺跡地に再び重複する遺跡地の割合が多いことは、諸磯c期の特徴的な分布の在り方として把握できる。散布地の立地は黒浜・諸磯a期からの継続や重複関係にあるものが大勢を占めるため立地状況に変化は少ない。

(4) 勝坂・阿玉台期の遺跡分布

対象地域のうち勝坂・阿玉台期に該当する遺跡地は、現在のところ13遺跡地で、その分布は第11図のごとくになっている。認めうる散布地はやや減少しているが、分布の在り方は前代までの傾向と同様に対象地域内ほぼ全域にわたり、適当な間隔をおいて分散しているものといえよう。箕郷町No.13・No.18・No.21遺跡、榛名町No.35遺跡はほぼ直線的な位置関係にある。これらの遺跡間の距離は0.6km、0.7km、0.6kmが計測できるが、こうした遺跡の関係は、箕郷町No.8遺跡、榛名町



第12図 加曾利E期の遺跡分布

No.11遺跡・No.26遺跡の関係、榛名町No.50・No.61遺跡・No.54遺跡の関係にも近似距離関係を認めることができる。これらの遺跡地と前後の隣接時期との関係を検討すると、諸磯c期から加曾利E期までの継続過程にある遺跡地は箕郷町No.8遺跡・No.18遺跡・榛名町No.26・No.60遺跡など5遺跡地、諸磯c期から継続するが、次時期の継続が認められないものが、箕郷町No.21遺跡・榛名町No.1遺跡など2遺跡地、新遺跡地形成によるものが榛名町No.56遺跡など2遺跡地、黒浜・諸磯a期の遺跡地と重複するものが榛名町No.29遺跡・No.50遺跡の2遺跡地である。遺跡地の立地は帯状台地の縁辺部が主体的で、やはり黒浜・諸磯a期以降の伝統的な立地の延長線上にあるものといえよう。

(5) 加曾利E期の遺跡分布

対象地域のうち、加曾利E期に該当する遺跡地は現在のところ、41遺跡地で、その分布は第12図のごとくになる。諸磯b期から勝坂・阿玉台期ま

での分布傾向に比べると、遺跡数は急激に再膨張していることと、遺跡の在り方に大散布地と小散布地の二面性が認められることに大きな特徴がある。大散布地は箕郷町No.1遺跡・No.2遺跡・No.8遺跡・榛名町No.19遺跡・No.26遺跡・No.34遺跡・No.35遺跡・No.37遺跡・No.13遺跡・No.14遺跡・No.15遺跡・No.50遺跡・No.51遺跡など8遺跡地で、箕郷町No.18遺跡の状況を除いて散布量は乏しいが散布範囲は広域におよぶ。平坦面を有する地形状況下に存在することは必然的であるが、大散布地の分布は一地域に集中することではなく、適当な間隔をおいて散在しているといえる。比較的散布量の多い箕郷町No.18遺跡と榛名町No.34遺跡、No.35遺跡の距離は1.3km、箕郷町No.8遺跡と榛名町No.19、No.26遺跡は0.8kmが計測できるがやや均一性がうする。小散布地は箕郷町No.12遺跡・榛名町No.7遺跡・No.2遺跡・No.33遺跡・No.38遺跡・No.39遺跡などが典型的で、小台地上や猫額大ほどの狭小な平坦面に散布地がある。前時代までの遺跡地の在り方と比べると、勝坂・阿玉台期の延長線上にある遺跡地が7遺跡地、黒浜・諸磯a期や諸磯b期の遺跡地と重複して散布が認められるものが6遺跡地で、その他は新遺跡地形成によるもので16遺跡地が数えられる。こうしてみると加曽利E期の再急増現象成立の最大の背景は新遺跡地の形成が要因といえる。黒浜・諸磯a期の新遺跡地形成は一台地一遺跡地占地で展開したが、それ以降の新遺跡地形成は諸磯b期が8遺跡地、諸磯c期が3遺跡地、勝坂阿玉台期の2遺跡であるのに比べると、遺跡数全体の新遺跡地が占める割合は特筆すべき事象といえよう。黒浜・諸磯a期から加曽利E期までの相対的時差のなかで対象地域内の遺跡地では、黒浜・諸磯a期から加曽利E期まで継続して該当時期の散布が認められるのは箕郷町No.18遺跡・榛名町No.60遺跡・No.61遺跡の3遺跡地がある。一時期欠落するのは箕郷町No.5遺跡の勝坂・阿玉台期の不在、榛名町No.34遺跡・No.35遺跡の諸磯b期の不在、榛名町No.52遺跡・No.53遺跡・No.54遺跡の諸磯c期の不在の遺跡地がある。

5 遺跡の動態と集団関係

榛名山東南麓地域の縄文文化の実態研究は端緒についたばかりである。この地域は縄文時代以降の厚い地層堆積が文化層を隔絶し、生活や文化の存在を示す資料の露出を阻んでいたため縄文時代の研究に関しては長い間未踏の地であった。しかし、諸開発事業の進展は榛名山東南麓にも波及し地形的様相や研究事情を一変しようとしている。大小さまざまな開発行為は一方で生活や文化の「跡」を物語る遺物類をもたらし、埋もれた遺跡の存在を教え、その「ありかた」を問かけようとしている。研究の初期段階はまず分布調査を実施し、地表に露出する遺物類の採集資料蓄積をはかる以外にない。採集資料の蓄積は榛名山東南麓地域の縄文時代の遺跡の動態を素描し得る有力な基礎作業といえるが、そのためには遺跡の継続期間を採集資料がすべて反映していることが必要条件である。広域に破壊し尽くされた遺跡地では採集できる遺物量も多く、遺跡の諸時期を網羅的に把握できる可能性もあるが、偶然の機会に地表に現れた遺物類には遺跡の存在は知りえても遺跡にかかわる諸時期がすべて反映されているとは限らない。まして採集資料だけでは残されている生活用具類や住居の構造や分布等をはかり知ることは出来ず、それにはやはり発

掘調査の果たす役割は余りにも大きいといえる。しかし、分布調査がただ単に遺跡の存在を確認するためのみにとどまらず、遺跡地の立地環境の観察、周辺遺跡との関係、諸時期の網羅的把握等、質を高めた悉皆的分布調査なら、採集資料が資料的限界性を内包しているとしても現状の採集資料の分析や比較検討で、一遺跡の発掘調査資料の詳細な検討のみに求めえない当時の社会生活、文化の主導的要因や成立背景の追及も可能であろう。浮かび上がった社会構造の輪郭がやがて知りうる実態像とかけはなれていようとも、現在の段階では建設的な批判の対象として研究の一助の役は果たせよう。今後の調査の継続によってはさらに遺跡数は増加し内容も修正されようが、現在までの採集資料を基礎に赤城山西・南麓の遺跡分布の動態をふまえて榛名山東南麓地域の遺跡の動態と集団関係の在り方を素描してみたい。

(1) 遺跡の動態

筆者は「群馬県史研究」21号誌上で赤城山西南麓地域の縄文時代の遺跡分布について、国土地理院発行の5万分の1の地形図「前橋」に表された地域内の地形状況を整理し、縄文時代早期から晩期までの遺跡分布の動向をとらえた。そのなかで中期の遺跡急増現象ばかりでなく、前期黒浜・諸磯a期に中期をしのぐ遺跡急増現象の存在を指摘し、また前期黒浜・諸磯a期の遺跡分布の在り方には、各遺跡に普遍的に共通する規則的な占地と急増現象の密接な結び付きを抽出した。すなわち、黒浜・諸磯a期の在り方は舌状地形上の占地景観に類似性があるばかりでなく一台地一遺跡占地に遺跡急増現象の成立背景がうかがえることを示唆した。そして黒浜・諸磯a期の遺跡分布の在り方に土器型式現象の本質的意味を見いだした。

利根川をはさんで赤城山と並び立つ榛名山東南麓地域の地形は、赤城山西南麓緩斜面との類似性が著しい。この榛名山東南麓地域の縄文時代の遺跡分布の動向を、赤城山西南麓と比較しながら整理しておこう。

榛名山東南麓では前期黒浜・諸磯a期以前に比定できる遺跡地は少ない。現在までのところ4遺跡地が確認されている。やがて黒浜・諸磯a期には遺跡数が急激に増加し、遺跡は東南麓地域全域に広がり濃密に分布する。それぞれの遺跡地周辺の立地条件や地形的背景は帶状台地縁辺に形成された侵食谷にのぞむ舌状台地状の地形に占地するのが大勢を占める。帶状台地の変化に乏しい縁辺部で、広大な後背地を背景とする場所には遺跡をほとんど認めることは出来ない。共通項として類型化できる舌状台地地形は、一方が侵食谷に面し両側を谷地や侵食谷で囲まれた舌状の独立した地形で、斜面より平坦面の割合が大きい。こうした舌状台地上にそれぞれ認めることができる黒浜・諸磯a期の遺跡地は、客観的にみて一台地一遺跡占地の関係以外はとらえにくく、赤城山西南麓地域と同様の状況である。また散布地台地の地形背景は舌状台地の先端部、侵食谷頭部周辺、侵食谷を隔てた対岸に隣接台地の先端部がのぞめる台地縁辺部など、相似した地形状況下に散布地は形成されている。

諸磯b期から加曾利E期までの期間は遺跡数が減少するが、一定の遺跡数を保ち、東南麓全域にわたって散在的分布傾向を維持する。加曾利E期には再び遺跡数の増加現象をまねき、遺跡の

在り方に大散布地・小散布地の二面性の存在が顕著になってくる。大散布地の占める割合の増加は、遺跡の性格の多様化を物語ろう。そして、加曾利E期以降の急激な遺跡減少とその継続を、榛名山東南麓地域の縄文時代の動向としてとらえることができる。こうしてみると榛名山東南麓の縄文時代遺跡分布の動向は、赤城山西南麓のその動向と極めて共通点が多い。特に縄文時代前半と後半の遺跡の消長傾向、黒浜・諸磯a期の第一次遺跡数増現象期と分布の在り方、加曾利E期の第二次遺跡数急増現象期と、散布地のもつ二面性に類似が著しい。

このように赤城山、榛名山両山麓地帯は地域的な隔たりが介在するが、縄文時代の遺跡の動向に共通事象が多い。これは同様な地形の広がりを背景として、人々の生活や文化は同様な社会的次元のなかに、また同様な時代の趨勢下に存在し、展開し、継続していたものと考えるのが妥当であろう。両山麓地域の縄文時代の遺跡の動態は、両山麓周辺地域の遺跡の動態ともかかわりをもつ。周辺の地域に展開する遺跡地の動向は、山岳地帯の河川の流域、平野部の川沿いの台地上などに展開するのが一般的である。地形的制約から、両山麓地域ほどの密集傾向は認められないが、やはり黒浜・諸磯a期や加曾利E期の遺跡の占める割合が多い。したがって両山麓地域ばかりでなく、周辺の地域の縄文時代の遺跡分布の動向にも、黒浜・諸磯a期と加曾利E期の増加傾向を認めることができるが、赤城・榛名両山麓を中心とした地域の縄文時代の遺跡の動態と集団関係は、遺跡が密集する両山麓地域の在り方に、より典型的に具現化されていると考えられる。とすれば時間の経過からみた両山麓地域の遺跡分布の動態は、両山麓地域とその周辺地域の時代性を強く反映しているといえよう。

両山麓地域の遺跡の動態は、黒浜・諸磯a期の第一次遺跡数急増現象期、加曾利E期の第二次遺跡数急増現象期の二つの画期を中心とし展開する。二つの画期を中心とした山麓地域の時間的な遺跡の動態は第13図のごとく示すことができる。遺跡の動態の特徴的な時期を5期に分類し、便宜上、順にローマ数字を冠しそれぞれの時期の特徴をひろいだしてみたい。

I期 少ない遺跡分布・分布は散在的

遺跡が少ないのは未発見の遺跡が多いことにも因るが今後の調査によっても極端に増加することはないだろう。黒浜・諸磯a期へ向けての胎動期。

II期 遺跡数の第一次急増現象期 一台地一遺跡地 自然環境の変化

遺跡急増現象の背景には生活の向上や技術の進歩ばかりでなく、海進海退などによる大きな自然環境の変化の影響もある。遺跡の動態にみる急増現象の生活基盤は、一台地一遺跡地占地で、一台地一遺跡地を可能にする範囲内で膨張。自然採集経済社会の枠組みのなかで、地域社会に秩序をもってすみ棲む。一台地一遺跡占地は隣接遺跡間に緊張関係を生じ、平衡関係を保つために「生活の論理」「社会の論理」を共有。論理は型式現象の本質意味と関連し、土器や石器、住居構造などの生活や文化に、近接遺跡間ほど強い相似性をもたらす。同様な生活表現を持つことで、社会の平衡関係を保つことが論理の使命で、論理は一台地一遺跡に具現される。

III期 遺跡数の減少 遺跡間の間隔の維持 移動

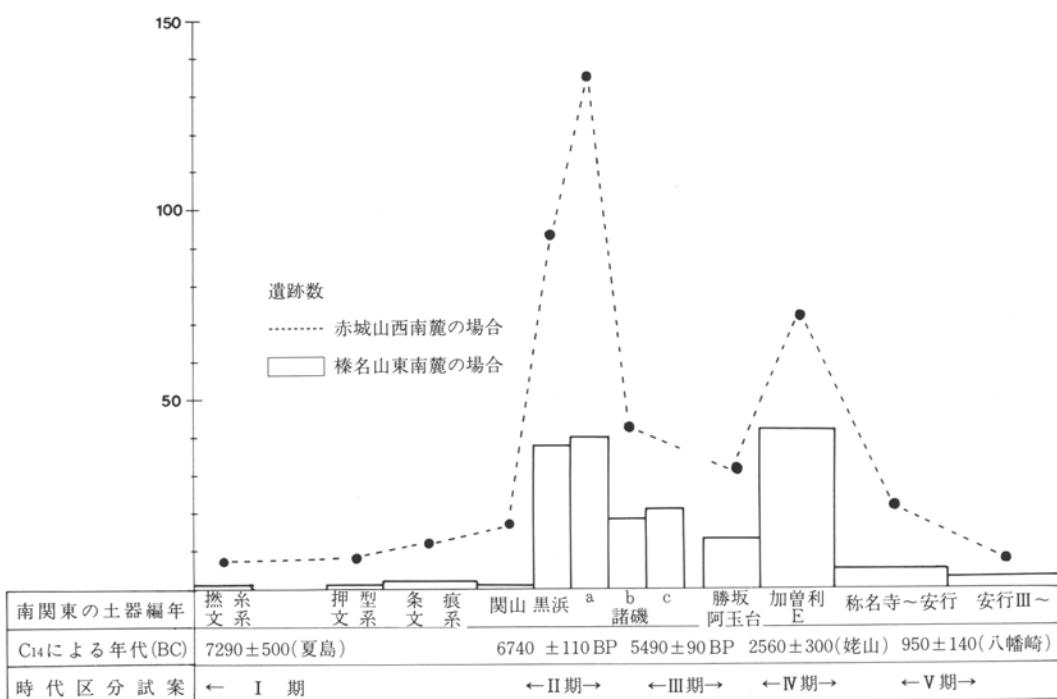
減少した諸磯b期の遺跡数は、その後加曾利E期に至るまで継続し、停滞的で顕著な遺跡数の増減はない。諸磯c期、勝坂・阿玉台期の遺跡分布は、いずれも適当な間隔をおいて散在する。前時代の遺跡関係が一台地一遺跡であることに対して、距離が遺跡間に介在することが特徴的。距離の介在は一台地一遺跡の関係を維持した「生活の論理」「社会の論理」の延長線上にあるものと考えられる。また、この時期の遺跡の動態には、集団移動の果たす役割が大きい。
 移動について(11)は後述したい。

IV期 遺跡の再急増現象 新散布地の形成急増 大散布地と小散布地

遺跡の急増現象は、広域的にみると中部山岳地帯の遺跡動向の影響も無視できない。黒浜・諸磯a期は、いわば北関東の赤城榛名両山麓地帯とした地域の特徴的な現象であるのに対して、この時期の遺跡急増は広域的な共通現象。両山麓地域の急増現象の主体的な成立要因は、新しく形成された散布地の多さにある。次時期へ継続する遺跡はほとんどなく、遺跡の膨張はこの時期を境に衰退の一途をたどる。分布の在り方は、大散布地と小散布地の二面性が顕著で、大散布地の占める割合も大きい(12)。小散布地は、猫額大の狭小の場所にもある。帯状台地の縁辺部や先端部に立地するものが多く、黒浜・諸磯a期に成立した伝統的な立地背景がうすれる。

V期 少ない遺跡数 散在的な分布

急激な遺跡減少を契機に、散在的な分布傾向が維持される。また遺跡地の平地への進出が顕著。



第13図 赤城・榛名山両山麓地域の遺跡の動態

未発見の遺跡が増える余地が十分にある。けれども、散在的分布傾向は変わることはない。

以上のように、赤城・榛名山両山麓地域の遺跡の動態を土器型式編年学の年代観にもとづいて、黒浜・諸磯a期と加曾利E期の遺跡数膨張の二大画期を中心に五期に分け、時代区分設定の検討試案としたが、周辺地域の動向とてらし合わせても、この地方の特徴的な時代性を象徴的に表現しているものと考えられる。さらに、具体的な遺跡の発掘調査資料から住居の形態や分布、生活諸用具の検討を加え、総合的な観点から赤城・榛名両山麓地域とその周辺の時代性を追及していくことが今後の課題である。

(2) 集団関係

散布地の存在は人々のなんらかの生活の跡存在の証しである。遺跡の追及は表面採集で可能だが、存在が確認されたそれぞれの遺跡について与えられる命題には、遺跡地には始まりがあり、終わりがあること、遺跡地にはなんらかの関係で結ばれた人々の集団が存在することがある。生活の始まりと終りは土器型式編年学の成果にたよれるが、生活の内容については発掘調査を待つ以外にない。人々の集団関係については、悉皆的分布調査と型式編年学の成果の援用と操作によってある程度可能であろう。遺跡の始まりと終りは集団移動の結果で、移動は集団関係を無視してありえず、移動と集団関係は密接な関係にあるといえよう。そこで榛名山東南麓地域の黒浜・諸磯a期から加曾利E期までの遺跡分布の動向からみた集団移動と動態のありかたを検討してみたい。

黒浜・諸磯a期の人々の集団は、一台地一遺跡内で構成された集団を基本単位とする。黒浜期にそれぞれの集団は移動の結果、山麓に形成された舌状台地地形を棲み分け、一台地一遺跡地占地で山麓全域に広がって分布、共存し、黒浜期から諸磯a期への移行を共有する。それぞれの集団の関係は一台地一遺跡社会を成立させ、維持する「論理」の共通関係で結ばれている。「論理」は社会秩序の維持の立場から緊張関係のある集団間の平衡関係を保つため相似た生活表現の選択という基本理念を基礎にもつ。

それぞれの集団は、諸磯a期末に生活の継続の終えんと移動の必要性にせまられる。移動と生活終えんの主因は、個々の集団独自の問題でなく、一台地一遺跡社会を解体させるような地域全体の共通問題であり、その対応の具体的な展開の表れがつづく諸磯b期の遺跡分布のありかたにある。

諸磯b期の遺跡数は、黒浜・諸磯a期に比べると急激に減少するが、分布のありかたは適当な間隔をおいて散在する。周辺の地域に諸磯b期の遺跡急増地帯が存在しない以上、大きな集団の移動は考えがたく、地域内での変遷を消化した結果と考えられよう。諸磯b期の遺跡数減少現象は、前時代の黒浜・諸磯a期のそれぞれの集団の生活の断絶に主因がある。諸磯b期の遺跡地は現在のところ21ヶ所が確認されているが、21遺跡中の15遺跡地が、黒浜・諸磯a期からの継続遺跡で、前代までの遺物散布が認められない新遺跡地の形成に因るもののが6遺跡ある。土器型式が継続線上にある遺跡地では集団の移動は考えられないが、新遺跡地の形成は集団の移動の結果で

あろう。また新遺跡形成の集団は、つづく諸磯 c 期へと継続しないものが大勢を占め一時期限りの宿命を内包する。したがって諸磯 b 期の集団関係は、前時代からの継続線上にある集団と、新遺跡地形成集団で構成され、適當な距離の介在が集団の関係を象徴する。集団間の関係は、一台地一遺跡から距離への変化をもつ「論理」の延長と解せよう。

諸磯 c 期の遺跡分布は、前時代と同様に適當な間隔をおいて散在する。隣接遺跡間に介在する距離の均一性がもっとも著しい時期である。諸磯 c 期の遺跡地19遺跡のうちで、明らかに黒浜・諸磯 a 期から継続線上にある遺跡は5遺跡、前時代までの人々の生活とかかわりのない新地に形成された遺跡地は4遺跡、諸磯 b 期不在で黒浜・諸磯 a 期の遺跡地と重複する遺跡地は7遺跡を数えることができる。したがって、それぞれの集団の性格は継続集団、新遺跡地形成集団、回帰性集団の三つに分類することができる。黒浜・諸磯 a 期の遺跡と重複する7遺跡は、黒浜・諸磯 a 期の生活地に再び散布地が形成されるもので、回帰的現象といえる。回帰的現象は、つづく勝坂・阿玉台期でも指摘できる。2遺跡が黒浜諸磯 a 期の散布地と重複し、その間は不在である。しかし次期の回帰現象は諸磯 c 期から比べると少ない。諸磯 c 期の19遺跡中11遺跡が移動の結果で生じており、集団関係の移動のはげしさを注目できる時期である。

勝坂・阿玉台期の遺跡数はやや減少の傾向にあるが、分布の在り方は前時代と同様である。13遺跡中9遺跡が前時代からの継続遺跡で、新遺跡地形成は少なく、比較的集団の移動の少ない時期である。また継続遺跡地は、続く加曾利E期に引き継がれるものが多い。

加曾利E期の遺跡数は再び急上昇し、散布地の在り方に大散布地と小散布地の二面性をもつ。大散布地は前代からの継続遺跡に多い。遺跡地の動態を見ると、新遺跡地形成によるものが遺跡中14遺跡で他を圧倒する。また黒浜・諸磯 a 期や諸磯 b 期の遺跡地と重複する回帰性遺跡が8遺跡でこの割合も多い。したがって、加曾利E期の急増現象の最大の要因は、他時期に比べて圧倒的に多い新遺跡地形成集団にある。新遺跡地形成や回帰性遺跡は集団の移動の結果であり、加曾利E期の集団関係は、激しい移動の結果発生している。集団関係は大散布地と小散布地の混在と新遺跡地形成を許容するもので、黒浜・諸磯 a 期以降の伝統的な集団関係から大きく逸脱する。榛名山東南麓の相馬ヶ原扇状地から前橋台地へ移行する地形上に位置する群馬町地内の遺跡分布調査では、縄文時代の遺跡地が51ヶ所確認されている。⁽¹³⁾ 26遺跡が加曾利E期に該当する遺跡地であるが、そのうち21遺跡が加曾利E期のみに限られる単純遺跡であった。この結果から加曾利E期の新遺跡地形成は山麓地域のみにとどまらない広域的な現象としてとらえることができ、黒浜・諸磯 a 期の急増現象とは根本的な相異を看取できる。そして加曾利E期以降急速に遺跡が減少し、再び加曾利E期の遺跡地に後の集団が回帰することがないことを考えあわせると、異常な集団関係と社会構造を想定できよう。

以上のように黒浜・諸磯 a 期から加曾利E期までの遺跡の動態の中に、それぞれの時期の移動と集団関係の輪郭を素描してみたが、他に黒浜・諸磯 a 期から加曾利E期にいたるまで、周辺の移動の実態をみこしながら、かたくなまでに一貫して継続する遺跡が6遺跡ある。多くの遺跡地

が継続と中断、新散布地の形成をくりかえすなかで、これらの遺跡はそれぞれの時期を通じて見過ごすことの出来ない重要な役割を果たしていたものと現状で推定しておきたい。

また諸磯C期と勝坂・阿玉台、加曽利E期の遺跡地に、空間と時間をおいた前代の遺跡地と重複する回帰性現象がある。榛名山東南麓地域は居住可能な条件を満たす地形の広がりは大きい。にもかかわらず重複する遺跡地の存在は、あながち偶然の結果とばかりは思えない。それを同一集団の回帰現象と考えることが妥当ならば、榛名山東南麓地域の黒浜・諸磯a期から加曽利E期に至るまでの遺跡の動態の変遷は、同系統の集団群の展開と結果とも考えられよう。

6 おわりに

榛名山東南麓における縄文時代の遺跡分布とその在り方を、黒浜・諸磯a期から加曽利E期の期間に焦点をあてて、赤城・榛名両山麓地域とその周辺の遺跡分布の動態からみた時代区分の素描と集団関係の在り方を検討してみた。散布資料という資料的限界性を前提とするが、時代区分は遺跡数の急増と減少現象を指標に、集団関係は黒浜・諸磯a期の遺跡分布の在り方に基礎をおいた。しかし榛名山東南麓の遺跡分布の現状はまだ未だ未知の遺跡も数多く、今後の調査の継続によってはさらに遺跡の内容や時期の補正もありうるが、現在の段階において分布調査の果たすべき方向と視点の展開例として、大方のご批判とご教示をいただければ幸いである。

関東を中心とした広域的な視点からみた縄文時代の遺跡分布の動態については、後藤和民の概括的な集計がある。¹⁴⁾これによると、中期の中部山岳地帯での遺跡急増現象、後期前半の東京湾沿岸地域の貝塚文化興隆による遺跡急増現象、晚期の東北地方の遺跡急増現象があり、時期により地域により遺跡分布の濃淡の差が著しい。こうした広域的な分布動向に新たに赤城榛名山麓を中心とした地域の、前期黒浜・諸磯a期遺跡急増地域の存在を加えられる。

今後の課題をいくつか整理しておきたい。群馬県内の縄文時代の研究にはまだ未知の分野や地域が多すぎる。全国的な研究動向と歩調を合わせ、地域の縄文時代の生活や文化の実態が広域的な視点で論議の対象となるのには、いくつかの乗り越えねばならない障害を内在しているといえる。地域に根差した地域の実態的研究の蓄積にこそ、縄文時代の地方研究のあるべき姿が模索できると考えるが、その実態的研究に分布調査の果たすべき役割は欠かすことはできない。分布調査は文化財保護上の有効な手段となるばかりでなく、地方の縄文時代の動勢を現状においては端的に追及できる唯一の方法であるからである。開発速度の速い今日、悉皆的な分布調査を組織的に取り組む必要を痛感すると同時に、両山麓地域を中心とした地方で、地域に根差した独自の相対的年代観の指標となるべき土器編年観の確立を早急にのぞみたい。悉皆的分布調査と地域に根差した土器編年の確立は、縄文時代の地方史研究の前提であり、今日的な克服すべき課題といえるが、これには本稿に付随する問題も多い。一つは南関東編年で一時期を画す十三菩題期、五領ヶ台期にかかる問題がある。両山麓地域とその周辺では他時期に比べて十三菩題期、五領ヶ台期に比定できる土器片類を散布する遺跡数は質量とも極めて少なく、諸磯C期から勝坂・阿玉台期への

移行過程に不明の点が多いことである。勝坂・阿玉台式に比定できる土器の混在も興味深い。他に加曾利E期の遺跡急増現象の背景は新遺跡地形成の急増にあるとしたが、各型式の継続期間の弾力性にかかわる問題などもある。これには三原田遺跡の住居跡平面形の検討から興味深い指摘¹⁵⁾もある。

このように、赤城・榛名両山麓地域とその周辺の縄文時代の動向に、黒浜・諸磯a期の急増現象、十三苦題期に五領ヶ題期の希薄性、加曾利E期の再急増現象とその背景などがクローズアップされてきたが、これは地域に根差した研究による問題点の具現化であり、地域に根差した実態的な地域研究が求められる所以でもある。

榛名山東南麓の遺跡調査に同行し、散布資料の検討に有意義な示唆を与えてくれた飛田野正佳さんに感謝の意を表したい。

注1 榛名山の地形と地質の概略的な理解は 土屋亥子雄・松本美智雄・斎藤歎雄・斎藤晋『箕郷町誌、自然編 昭和50年森山昭雄「榛名山東南麓の地形一特に軽石について」』愛知教育大学地理学報告、36、37号、昭和46年、等を参考にする。

注2 『群馬県遺跡台帳、II 西毛編 群馬県教育委員会 昭和47年 これによると榛名山東南麓地域では箕郷町地内で大字富岡字竹の内1278、大字富岡字鴨入の二ヶ所があるが榛名町地内には縄文時代の遺跡の記載はない。

注3 田口一郎『金敷平、長者久保遺跡、箕郷町教育委員会 昭和58年

注4 榛名町上室田字雨堤地区の帶状大地上ではローム層上の地層は2m20cmが計測でき、層中に10cmのB軽石層、15cmのF P層が介在している。対象地区では、西方にいくにしたがい、表層地層が厚くなり、また火山灰層の占める割合も多くなる。

注5 文化財保護指導員小林健次氏の御教示による。採集資料は現在小林氏が保管するが資料の詳細については飛田野正佳氏が報告する予定で準備中である。

注6 岡本勇・戸沢充則『縄文時代の発展と地域性—関東』『日本の考古学II、河出書房以下土器型式の認識と相対年代観はこれにもとづく。

注7 遺跡における住居の継続と中断の在り方については高橋護の検討例がある。「縄文時代の集落について」『考古学研究、6—11昭和40年 資料の操作の方法についてはこれによるところが大きい。

注8 黒浜・諸磯a期は一台地一遺跡占地を一般的とするが長野県阿久遺跡の在り方も考慮に入れておきたい。

注9 鬼形芳夫『赤城山麓における縄文文化の展開』『群馬県史研究、21号 群馬県史編纂委員会 昭和60年

注10 茅山期の集落立地状況と生産諸力の発展をもたらす労働用具の変化を「ゆるやかな発展」という言葉であらわされる縄文時代の社会と文化と大きく上昇させたものとし茅山期を時代性の画期とみる考え方たもある。(注6と同じ)

注11 長野県の縄文文化について諸磯a期と諸磯c期の遺跡分布の相異を関東を中心とする漁労を生業の主体とした文化と植物依存や狩猟中心の文化の飛躍的な胎動期と推定し諸磯c期に時代性の画期を求めるものもある。(戸沢充則「諏訪湖周辺における中期初頭縄文遺跡—諸磯期における漁労集落と狩猟集落」)『信濃、5—5 昭和28年

注12 長野県松本平では大遺跡地が半径4kmの範囲内に一ヶ所の割合で分布すると指摘されている(樋口昇一「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報」)『信濃、16—4 昭和39年 その他にも静岡県大井川流域では約10kmごとに大遺跡地が分布するがここではその背景をイノシシの行動範囲の一致とを考え合わせている。(市川寿文「縄文時代の共同体をめぐって」)『考古学研究、6—1 昭和29年

注13 榛名山東南麓の相馬ヶ原扇状地の末端から前橋台地へ移行する地域にある群馬郡群馬町地内の悉皆的な分布調査による縄文時代の遺跡数は51ヶ所であるがそのほとんどが新遺跡地形成による加曾利E期であった。「群馬町の遺跡」群馬町教育委員会 昭和61年

注14 後藤和民「原始集落の方法論序説—とくに縄文時代早・前・中期を中心として」『駿台史学、27号昭和45年

注15 赤山容造「竪穴住居」『縄文文化の研究、8 雄山閣 昭和57年

第1表 箕郷町地内の遺跡とその時期

No.	撲糸 文系	押型 文系	条痕 文系	関山と その以前	黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	勝坂 阿玉台	加曾利 E	後期		晩期	備考
											前	後		
1					○	○				○				台地北縁辺
2								○		○				台地中央部北半は表土掘削
3														
4							○		○					台地南縁辺、表土掘削排土中に土器片
5					○	○	○	○		○				舌状台地先端部全面に多量に石皿、石斧等
6	○	○			○	○		○			○			
7										○				小舌状、少量
8					○			○	○	○				台地北縁辺、道路改修時に出土量多
9						○		○		○				舌状台地西縁辺、表土掘削多量
10					○	○	○	○						舌状台地先端部に広範に散布
11														台地南縁辺、遺跡既に無
12					○	○	○			○				
13					○	○			○	○				台地東縁辺
14					○	○								小舌状台地、地形頂部
15						○								舌状台地、地形頂部、少量
16					○	○			○	○				舌状台上先端部全面に散布
17					○	○								小舌状台地北縁辺遺跡は既に無し
18					○	○	○	○	○	○				台地西縁辺、遺跡の大半は表土掘削、多量、土器、石器等
19					○	○				○				台地西縁辺、多量に散布
20										○				小舌状台地頂部周辺一帯
21					○			○	○					舌状台地頂部から先端部にかけて地層断面と住居跡

第2表 植名町地内の遺跡とその時期

No	撲糸文系	押型文系	条痕文系	関山とその以前	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	勝坂阿玉台	加曾利E	後期		備考
											前	後	
1					○								台地奥端部
2										○			
3					○	○							
4													
5										○			台地中央谷頭部周辺
6							○						
7													小舌状台地
8						○	○						台地中央部トレンチ状の芋穴から
9					○	○	○	○					台地東縁、谷頭部周辺
10	○	○						○					台地中央部
11			○	○	○		○	○	○				舌状台上中央部全域
12				○									台地西縁辺、少量
13										○			
14				○	○					○			台地東縁辺
15				○	○	○				○			台地西縁辺
16				○	○								小舌状台上
17				○	○								舌状台地先端部
18				○	○								舌状台地先端部、遺跡既に無し
19										○			台地西縁辺、トレンチ状芋穴から多量に
20					○	○				(○)			台地西縁辺
21										○			台地西縁辺、圃場整備済み、遺跡無し
22					○	○							台地東縁部、工場建設遺跡無し

No	燃糸 文系	押型 文系	条痕 文系	関山と その以前	黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	勝坂 阿玉台	加曾利 E	後期 前後	晩期	備考
23										○			圃場整備済み
24						○	○						台地中央部、少量
25						○	○			○			台地南縁辺
26									○	○			台地東縁辺、散布多量
27										○			台地西縁辺、圃場整備済み、遺跡既に無し
28						○							台地中央部、わずかな散布
29						○			○				台地東縁辺、採集は広範囲に可能
30					○	○		○					台地西縁辺
31					○	○	○	○					舌状台地、東縁辺
32								○					小舌状台地上先端頂部
33										○			小舌状台地、中央頂部少量
34					○	○				○	○	○	台地西縁辺
35					○			○	○	○		○	台地東縁辺、多量、広範に散布
36						○							台地東縁辺、少量散布
37										○			台地中央部一帯、広範
38										○			台地中央部、わずかな散布
39										○			小舌状台地頂部、少量
40						○							
41						○	○						舌状台地先端部
42						○	○			○			台地中央頂部、少量
43						○	○						台地先端部、少量
44										○			
45									(○)				

No	燃糸 文系	押型 文系	条痕 文系	関山と その以前	黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	勝坂 阿玉台	加曾利 E	後期 前	後期 後	備考
46					○	○		○					台地東縁辺、表土削平のため、少量採集
47					○	○				○			台地西縁辺
48					○					(○)			台地中央部、極少量
49					○	○							台地中央部
50					○				○	○	○		台地東縁辺、多量に散布
51					○					○	○	○	台地東半部、石皿、石斧など多量
52								○		○			台地東縁辺
53							○			○			台地西縁辺
54					○	○			○				台地東縁辺
55		○			○	○							台地頂部平坦面、表土掘削、遺跡無し
56									○				
57										○			
58							○						台地西縁辺、少量
59					○								台地東縁辺、谷頭部周辺、少量
60							○	○					舌状台地中央部
61						○	○	○	○	○			台地北縁辺
62						○							小舌状台地頂部
63						○				○			台地北縁辺、少量
64							○						
65						○	○			○	○		丘陵状地形頂部平坦面
66										○			台地先端部
67									○	○			小舌状台地、中央頂部
68													小舌状台地、中央頂部